

日本近代における集落研究の史的展開—建築学および周辺研究分野の文献精査を通じて—

新渡戸稲造	民家研究	村落地理学
村落社会学	民俗学	集落研究

序 研究目的

日本において集落を対象とする研究は新渡戸稲造¹ (1862-1933) および郷土会²がその最初期とされている。新渡戸が構想した「地方学」は、郷土会の活動を通じて柳田國男³ (1875-1962) や小田内通敏⁴ (1875-1954) に大きな影響を与え、のちの民家・集落形態・共同体・習俗などを対象とする集落研究の発展に貢献した。以後、集落研究は建築学・村落地理学・村落社会学・民俗学を中心とする複数の分野に展開して進められ、各分野で多くの実績が積まれてきた。しかし、それら諸分野における集落研究の展開を連関的に整理した例は数少ない。⁵そこで本研究の目的は以下の2つとする。

Ⅰ：「地方学」に端を発し各学問分野に展開していった日本近代の集落研究を対象とし、それぞれの分野における史的展開および主たる研究者の系譜を図化し整理する。

Ⅱ：Ⅰを踏まえ、また集落に関連する行政の取組みなどの社会背景の変遷を対応させることで、各分野の間を横断する要素（社会情勢、制度、登場人物等）を明らかにする。

第1章 新渡戸稲造と郷土会

本章では新渡戸稲造および郷土会に焦点を当て、当時の社会背景の中で新渡戸が構想した「地方学」の目的とその意義を明らかにした。

■新渡戸稲造の集落研究

新渡戸が『農業本論』(1897)で行なった集落研究は、集落の形態とその起源に関する考察であった。それらは十分に体系的なものとはいえないが、ドイツの近代科学の導入のもとで日本初の集落地理学的な記述を行なった先駆的なものであった。

■「地方学」の目的とその意義

新渡戸が構想した「地方学」の目的は地方の研究を通して日本の国体を把握すること。また貧しい農民を救済する「経世済民」の学となることであった。「地方学」は結果として体系的に大成することはなかったが、村落研究の方法論の提示と村落研究の啓蒙という2点の意義があった。⁶

■郷土会の活動

「地方学」の思想は郷土会の活動で実践された。郷土会は1918年に日本初の総合的調査である「内郷村調査」⁷を行なった。しかし同調査の報告書の刊行を巡って、郷土研究の学問体系化を目指す柳田と郷土の個性を追求する小田内は意見が対立した。⁸郷土会は1919年の新渡戸の渡欧を期に自然解散の形で解散した。

Historical development of Rural Settlement Research during the Japanese Modern Era—Through Examination of Documents about Architecture and Surrounding Research Firdls—

持続的環境・建造物群継承地区研究ゼミ
IX09A0691 小林千尋

第2章 建築学における民家・集落研究

本章では、建築学における民家・集落研究を社会背景を踏まえて整理し、主たる研究者の系譜を明らかにした。

■民家研究の萌芽

日本における民家調査は佐藤功一⁹ (1878-1941)、今和次郎¹⁰ (1888-1973)らを成員とする白茅会¹¹によって行なわれた。その目的は近代化の中で消滅しかけている民家を記録採集することであった。戦前の民家研究者の活動によって民家の形態の全国的分布が明らかにされた。

■民家の保存・活用・再生へ

戦後の民家研究は太田博太郎 (1912-2007)、稲垣栄三 (1926-2001)、伊藤ていじ (1922-2010)、大河直躬 (1929-)ら¹²を中心に行なわれた。戦前の非体系的な民家研究を批判し、『民家のみかた調べ方』¹³ (太田、1967)の刊行により民家の復原編年調査の方法論が普及した。1966年から「全国民家緊急調査」が重要な遺構の保護という観点から行なわれ、1968年から1977年までの10年間に244軒の民家が重要文化財に指定された。1975年の文化財保護法の改正により「伝統的建造物群保存地区」¹⁴が条例で制定され、民家の保存・活用は建築物単体から歴史的な地域環境へと面的に発展することとなった。

■建築学における集落研究

1963年、磯崎新¹⁵(1931-)・伊藤ていじらは『建築文化』特集「日本の都市空間」を刊行する。その歴史的意義は「近代合理計画思想へのアンチテーゼ」を提起したことにあった。¹⁶同書を期に、集落全体を広域的に調査・実測するデザイン・サーベイ¹⁷が70年代に展開されるようになる。宮脇檀¹⁸(1936-1998)研究室では景観としての統一性の要素が分析され、神代雄一郎¹⁹(1922-2000)研究室ではコミュニティ調査の名の下で集落の共同性が調査された。原広司²⁰ (1936-)研究室では世界を対象にした集落形態分類の理論が模索され、集落研究は方法・対象ともに多様な広がりを見せた。

80年代には計画研究の可能性を求めアジアを中心とする海外の住居・集落の研究が盛んに行なわれるようになるが、一方で日本建築学会では『図説 集落』²¹ (1989)が刊行されるなど、建築学からの日本の集落の維持・保全計画が展開された。

KOBAYASHI Chihiro

第3章 周辺分野における集落研究

■民俗学における集落研究

柳田国男は民俗研究の方法論の確立を目指し『民間伝承論』(1934)『郷土生活の研究法』(1935)を刊行して民俗資料の分類法を提案した。1934年には「全国山村調査」が行なわれ、柳田の指導の下、全国52ヶ所の山村が3年間にかけて調査された。柳田が創設し折口信夫²² (1887-1953)が深く協力した日本民俗学は昭和初期に体系化された。渋沢敬三²³ (1896-1963)は在野の研究機関であるアチック・ミュージアムを立ち上げ、民具をはじめとする物質文化研究を行なった。渋沢の下では早川孝太郎²⁴ (1889-1956)、桜田勝特²⁵ (1903～79)、宮本常一²⁶ (1907-1981)らが活動し、全国でフィールドワークで大きな成果をあげた。

戦後、和歌森太郎²⁷ (1915-1977)を中心に日本民俗学の学問的な再構築が行なわれた。また福田アジオ²⁸ (1941-)は『日本民俗学方法序説』(1984)において柳田の理論を批判的に検証した。

■地理学における集落研究

郷土会で中心的役割を果たした小田内通敏は『帝都と近郊』²⁹ (1918)を刊行し人文地理学の確立を目指した。昭和初期以降は小田内、綿貫勇彦³⁰ (1892-1943)、佐々木彦一郎³¹ (1901-1936)らの研究によって集落の形態論的な研究が蓄積された。戦後の歴史地理的な村落研究は、矢嶋仁吉³² (1907-1992)らによる『集落地理講座』(1957)の刊行などによって従来の研究が集大成された。また水津一郎³³(1923-1996)『社会地理学の基礎問題』(1964)など生活共同体の空間領域に観する研究が行なわれた。

1970年代後半からは村落地理学の方法論的な議論をふまえつつ、村武精一³⁴ (1928-)や樋口忠彦³⁵ (1942-)など関連領域の研究と呼応しながら方法論が展開された。³⁶

■社会学における集落研究

戦前の農村社会学では、有賀喜左衛門³⁷ (1897-1979)の「家・同族理論」・鈴木栄太郎³⁸ (1894-1966)の「自然村理論」の二つの理論によって、封建的な農村社会の基本構造を日本独自の共同体の性格から分析した。これにより農村社会学の基礎が築かれた。福武直³⁹ (1917-1989)を中心とした農村社会学者は、農地改革や民法改正などの制度改革が農村社会にどのような民主化をもたらしているか、また農村の近代化に必要な生産力の向上を研究テーマとした。福武が提起する「構造分析手法」は、村落構造を、「経済構造・社会構造・政治支配構造」の3つの構成要素から分析するものであった。⁴⁰1975年、地域社会研究会⁴¹が結成され、都市と農村の両者を念頭においた「地域社会」を対象にした地域社会学が提唱された。全国総合開発計画による地域変動をを構造分析による手法を用いて地域開発のメカニズムを分析していった。

早稲田大学創造理工学部 学部4年

第4章 考察 日本近代における集落研究の史的展開

考察部である本章では、第1章から第3章で行なった各分野の集落研究の整理を踏まえ、各分野の図を合わせた集落研究マップを作成した。マップを用いて各分野の相互関係について考察を行なった。(裏面 図参照)
また集落の総体的な構造をふまえ、分野横断的な集落研究の視点を評価した。

結論

まず、日本近代における集落研究について、その史的展開を研究者・研究活動の連関から整理した。特に第1章では、新渡戸稲造と郷土会、第2章では建築史学における民家研究、デザインサーベイ、集落保全計画の展開、第3章では民俗学、地理学、社会学など周辺分野の研究動向に焦点を当て、それらの展開を明らかにした。またそれらを踏まえ、各分野を横断して展開した日本近代における集落研究の全体像を明らかにした。本研究では上記の過程を図化することで示した。

謝辞

本研究にてお世話になりました中川先生、中谷先生、また中谷研究室の皆様にも、厚く御礼申し上げます。

注釈
1、日本の農政学者、教育者、倫理哲学者。日本における科学的な集落研究の創始とされ1919年以降は 国際連盟事務次長も務め国際問題に従事した。
2、具体的な研究対象として、地名、家屋の建築法、村落の形態、土地の分割法、言語・方言の5つを取り上げた。さらに旧家の記録、村鏡、水帳、明細帳などを学術的に利用して各地方の古書などを学術的な方法によって編集することを説いた。
3、柳田は農商務省農務局に勤務していたが、郷土会の活動を通し、日本の民俗学の創始として日本民俗学の大成に尽力した。
4、日村落地理学者。人文地理学の大正15年「人文地理」を発刊した。
5、日本村落史講座編集委員『日本村落史講座』(雄山閣出版,1992)では日本村落史を【景観】【生活】【政治】の三支柱を立てて編纂している。
6、関戸明子『新渡戸稲造の「地方学」とその村落研究の思想』(奈良女子大学 研究年報34,1990)を参照した。
7、対象地は神奈川県津久井郡内郷村であり、調査は柳田国男、小田内通敏、正木助次、牧口常三郎、中桐確太郎、佐藤功一、今和次郎、草野俊助、石黒忠篤、中村留二、田中信良によって10日間をかけて行なわれた。
8、並松信久「新渡戸稲造における地方(じかた)学の構想と展開」(京都産業大学論集、社会科学系列28,2011)
9、早稲田大学に建築科を創設したことで知られる日本の建築家。代表作に「大隈講堂」など。
10、早稲田大学教授。民家、服装研究などで業績があり、「考現学」の創始として知られる。
11、1917年、柳田国男、農務省役員石黒忠篤、建築家大熊喜邦、小田内通敏、佐藤功一など民家研究の中枢となる顔ぶれが集まって設立された。刊行物に「民家図集第1集・埼玉県」(1918)がある。
12、1955年に開催された建築学会大会 研究協議会「民家研究の成果と課題」で従来の民家研究の問題点を指摘し、戦後民家研究の基礎を築いた。
13、民家調査の共通の形式が民家の編年判定表として役立られた。
14、文化財保護法では「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物で価値が高いもの」および「これと一体をなしてその価値を形成している環境を保存するため、地域地区として都市計画決定した、または条例で定めた地区」と定められている。
15、建築家。代表作に「つくばセンタービル」など。
16、明治大学神代研究室、法政大学宮脇ゼミナール『復刻 デザイン・サーヴェイ』(彰国社,2012)参照。
17、特徴的な集落や地域を選び、実地調査や分析を通してその空間デザインの仕組みを読み解いた。
18、建築家。代表作に「松川ボックス」など。
19、建築史家。明治大学名誉教授。
20、日本の建築家。代表的な著作に『集落の教え100』(1998)など。
21、建築学や地理学、文化人類学の分野の集落空間が図化されている資料を整理分析し、今日の集落空間計画を考察している。
22、日本の民俗学者。柳田國男の高弟として民俗学の基礎を築いた。「まれびと論」や「依代」などの独創的な概念に日本文化の根底があるとした。
23、第16代日本銀行総裁や大蔵大臣を務めた財界人。祖父は渋沢栄一。
24、民俗学者・画家。柳田民俗学を学んだのち渋沢の下で研究した。
25、民俗学者。全国の漁村集落の研究を行なった。
26、民俗学者。戦前から高度成長期まで日本各地をフィールドワークし続け、膨大な記録を残した。武蔵野美術大学教授。
27、日本の歴史学者、民俗学者。民族学的視点で柳田民俗学を継承し、民俗学をアカデミズム研究に導入した。
28、民俗学者。和歌森太郎の下で民俗学を学ぶ。
29、東京と郊外を圏構造的にとらえている。図8参照。
30、農村地理学者。ドイツ景観論を摂取し形態論的考察を行なった。代表的な著作に『集落地理学』(1933)など。
31、村落地理学者。柳田国男の下で民俗学を学び、早くから生活や文化への関心を示した。代表作に『村の人文地理』(1933)など。
32、村落地理学者。代表的著作に『集落地理学』(1956)など。
33、人文地理学者。小集団の生活の空間的な領域を「基礎地域」と命名した。
34、文化人類学者。代表的著作に『祭祀空間の構造：社会人類学ノート』(1984)など。
35、日本の景観学者。代表作に『日本の景観：ふるさとの原型』(1981)など。
36、山野正彦や八木康幸らの活動があげられる。
37、有賀の家・同族理論は、家産と家業を基盤とする日本独特のイエが他のイエと相互扶助的な連合関係を形成する家の連合を理論化した。ムラは家連合によって構成され、同族的家連合と村組織的な家連合の二類型があるとした。
38、鈴木其自然村理論は、農村における集団や社会関係の累積状態を分析して「社会地区」を取り出し、第二の社会地区(自然村)に「村の精神」を見いだした。
39、日本の社会学者。村の結びつきについて、同族的結合の強い東北を「東北型農村」と規定し、同等の家族によって構成される農村を「調組結合」とし、西南型農村と規定した。
40、「地域社会学講座1」(東信堂,2006)参照。
41、福武直や連見吾彦を中心に設立された。

Undergraduate student of Creative Science and Engineering, Waseda Univ.

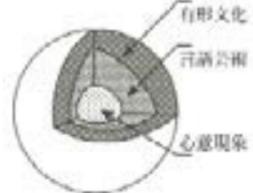


図6 民俗資料の3分類



図7 宮本常一による写真（東通村）



図8 東京郊外地域圏(「帝都と近郊」)